

それからケインズもシュンペーターも発展ということについては、そこに英知をもってこれを補っていくという人類の努力が常にくり返されているというようなことを述べられていたように思います。それから今のお話の通り資源は無限であっていくらでも資源を使って物をつくってもいいという生産の論理は行きづまりになっていると思います。地球上の資源は再生産しながらであれば原料として使ってもよいのです。それは統一原理の中にちゃんと書いてあります。統一原理によれば神は万物を創造されたけれどもそれはかってに使えばなしでいいというような創造ではなくて、人類の全ての者が自然を利用して神の心情に応えるようにするのが創造の目的であります。神は創造を行った時に常に良しといわれておりましたけれども、その良しということの中には、創造されたものを人間がかってに使って、かってに生産して使えばなしにして自分たちの利益のためだけに使っただけでよろしいというようなことは少しも含まれていないのです。それでいま脱工業化社会ということでミシガン大学のカーナーや他のグループの中にはそういう生産方法は間違っているという考え方が非常に強く現われているようです。従いまして今の御指摘のように、地球上の資源はいくらでも使っただけで物を作るという生産の構想は、確かにそれは限界にきているようです。もし使いたいならば、再生産しながら使え。空気を汚したら空気をきれいにして生産しなさい。水を汚したら水をきれいにして産業をおこしなさい。それが新しい生産の論理である。こういったことが統一原理の中にちゃんと誤り込まれております。地球上の資源をやたらと使えばなしでいいというようなことは創造主は考えておられないということを統一思想では教えております。従いまして、これは生産の論理をかなり修正し、考え直していかなければいけないということではないかと思えます。

それから資本主義の矛盾ということを考えるべきだというお話がありました。資本主義経済の矛盾、私は「商学流通論」の中の「資本主義的論理の終焉」という項目で、原理論から資本主義生産の論理はすでに終焉の段階にきているということを述べてあります。数年前に李相憲先生の教えをうけてから、それを自分の著書の中に取り入れまして、「資本主義は反省しなさい。反省しなければいきづまる」こういうことを訴えております。これは私ごとでございますけれども確かにそのとおりだと思いますので一言述べさせていただきます。

## マルクス主義人間学批判 [I]

—— フォイエルバッハの人間把握批判 ——



金 泰 昌

(忠北大学教授・社会科学 政治哲学)

目 次	目 次
I. 人間把握の問題提起	(a) 宗教批判
II. 転換期の性格規定と人間把握	(b) 哲学批判
III. フォイエルバッハの人間把握	B. フォイエルバッハの人間把握
A. フォイエルバッハの基本的立場	IV. いくつかの評価
	V. 統一思想を通してみた批判

### I. 人間把握の問題提起

パネンバークという神学者は、今日、我々が人間学の時代に生きていると言っている<sup>1)</sup>。過去のいづれの時代よりも人間の問題が論ぜられ、人間の本質に対する反省が深刻に行なわれていることは明白な事実である。

しかし私は、我々が生きている今日は、ただ人間学の時代であるだけでなく、人間学的な危機の不意うちする人間学的な転換期であると思う。これまで人間と世界のさまざまな現象と、そこから発生する問題を、理解し、説明し、納得することのできる理解と視覚と理論の基準としての役割と機能をはたしてきた人間把握が徹底的にこわれてしまった。そのため一定の方向をとらえられずに彷徨する人間学の荒蕪地になったのは、異質的な共産主義イデオロギーの基盤になっているマルクス主義人間学の挑戦がいうまでもなく大きいからである。どのような人間把握を基準とみなすかによって、世界観と価値観が異なるようになり、政治・社会・経済・文化・宗教等々の、あらゆる人間学的営為に対する模範の設定と説明方式が異なるようになるために、人間の生存の基本条件に関して、深刻な危機であるといわざるをえない。

1) パネンバーク著「何が人間か？」(神学に照らしてみた現代の人間学)金ヒョク訳;世界基督教思想体系8(ソウル:新太陽社,1975)350p.

人間の行為と作製と成就を人間の基本であると根本上から理解し、説明し、納得することのできる時は、それでも幸福な時期であると考えられる。しかし、人間の目の前で展開される人間と社会と世界の現象と問題が、我々の基本的な人間の理解をもとに形成された常識と合意をあまりにも大きく逸脱するとき感じられる当惑と挫折は、大きな悲劇たらざるをえない。

ある意味で人間は、いつも何度かくり返し人間学的な転換期に直面する。ある種の人間把握が徹底し、大きな変化を経てゆくようになる伝統と探索の時期であると感じられるようになっていくからである。個人的に集約的に、人間はいつも転換期に生きては死んでゆく存在たらざるをえないかもしれない。そこでいつも人間の最も切実な問題がすなわち、人間把握の問題であると考えてみることができる。しかし、今まさに生きている今日の我々にとっては、他でもない今日こそ大きな転換期なのである。だから今日の最も切実な問題は、やはり今日の人間把握の問題たらざるをえないのである。だからいつの時代であっても、その時代ごとに、今日の最も切実な問題がすなわち、人間把握の問題であったし、そのような今日が長い歴史を通して、たえず受けつがれてきたために、人間把握の問題は長くくり返されてきた古い問題であると同時に、そのたびごとに新しく提起されざるをえなかった新しい問題なのである。

古い問題でありながら新しい問題である人間把握の問題はいつどこであっても、今日の最も切実な問題であったし、今もそのために過去のいかなる先覚者も対決せざるをえなかった問題と挑戦は、時間の経過とともに埋葬された過去の事件として終わらずに、今日ここで我々が対決せざるをえない問題と挑戦として、実存の地平上に蘇えるようになるのである。人間把握の問題は、誰かが一度なしとげればそれで結末が現われるようになる一回性の問題ではない。いつなしとげておいてもまた調べ、新しくなさなければならぬ古くも新しい問題なのである。

このように、人間把握の問題が古くも新しいということは、人間が本質的に完成した存在でないところに由縁するとみることができる。未完成でありながら、いつも完成への途上にあり、その完成というのが、何らかの計画的な性格をもった実体の状態ではなく、質的な深さであるために、蓄積の効果を視聴覚的に確認することによって、一段階ずつ点検することのできる性質のものではない。人間にあって、人間把握の問題は、そのたびごとに必ず原点から出発しなければならない問題である。そのような意味から、それは代理とか譲渡が不可能である。一般に、代理の認識や借用の把握が容易に考えられるが、そこでたびたび要約された形式で提示される抽象的な人間把握をもって安住したり、そこにすかさず妥協してしまふことによって、苦悩の鎮痛を省略しようとするが、結局、自から対決してゆかなければならない時代ごとに、そして人間の問題たらざるをえないのである。そこで全く同じであるとか似かよった人間把握の問題が、他の時代、場所でもくりかえし提起され、対決を要請されるのである。

そのために、今日の我々が当面した問題は、我々の問題でありながら過去の問題でもあったし、以前に提起された問題であるとして、今日の意味が色あせるのではないのである。我々はこのよう

な考えの脈絡からフョイエルバッハの人間把握をみようとするのである。フョイエルバッハが経験し構築した人間把握の問題はフョイエルバッハの問題でありながら、我々自身の問題だからである。

ところで、ここでフョイエルバッハの人間把握をみてみようとするとき、次のようないくつかの企図を明らかにしておく必要があるようだ。

第一に、私は、今日の我々がフョイエルバッハと全く同じ姿で、そして全く同じ意味において、人間学的な転換期に処しているという前提から、その転換期の性格とそこから生ずるようになる人間把握の問題を明らかにしてみようとするのである。転換期の性格規定にしたがって、人間把握の焦点と方向に対する解釈が異なりうるという人間学的な視覚を立証しておきたいのである。

第二に私は、フョイエルバッハの人間把握が、結局、マルクス主義人間学の流れをなす一つの被であることを認めながらも、フョイエルバッハの人間把握がそれ自体として持っている特徴と限界を明らかにしてみようとするのである。それは人間の一次的な関心が、フョイエルバッハの人間把握こそその時代の問題提起と挑戦に対する対決としてどれほど切実なものであったかをみはからい、それが今日の我々の人間把握に対してもつ意味を問うところにあるからである。

そして、第三に私は、フョイエルバッハの人間把握を同時代人たちが、それ以後のマルクス主義者たちが、どのように評価したかをみとめるだけでなく、統一思想の立場と視覚から批判、評価してみようとするのである。マルクス主義の哲学体系やフョイエルバッハの人間把握やその理論的批判、分析、評価が、さまざまな側面からなされてきたが、包括的かつ体系的な批判の眼目を提示するのが統一思想であるというのが私の基本的な立場だからである。そして統一思想だけが今日の人間学的危機を克服することのできる正しい人間把握をそなえることができるだろうという期待と念願をもっているからである。

## Ⅱ. 転換期の性格規定と人間把握

フョイエルバッハは、十九世紀のヨーロッパの人である。そこで、フョイエルバッハが処した転換期の性格は、十九世紀のヨーロッパをいかに見るかによって規定されざるをえない。とすれば一体、十九世紀のヨーロッパはどのように性格規定をすることができるだろうか？多様な立場に立ったさまざまな解釈と規定が可能だろう。しかし、人間把握という視覚からみるときは、十八世紀までの理性人間 (homo sapiens) に対する確信と合意が倒れ、新しい人間把握の根拠と方向を模索する時代であったと規定できないだろうか？

十八世紀までの人間把握は、人間を理性的な動物、または理性的な被造物とみ、完全かつ無限なる

理性はもともと、人間を超越した神に属したものであったが、人間もそのような理性をもっている存在であると把握したのである。このように人間も持っていると思われる理性を人間に賦与する主体が、初めは神であったが、後には自然であるとみるようになった。そして人間は、どこまでも理性の与えられた生物としてそのような理性を開拓し、発展せしめることも、他でもない、理性がなければならぬとみなされた。とりわけ18世紀ヨーロッパの啓蒙主義思想の特徴は、理性が理性みずからの力によって展開し、発展するという自己意識と自己主張からさがし求めることができるのである。そして、17世紀までのように、理性がただ対象によって自然に世界の法則を発見する側に傾いたとすれば、18世紀は、人間がみずからつくった歴史的世界を発見し、それを征服する側に傾けられたとみることができ、19世紀は、歴史的世界をつくりだす人間の本質を暴露せしめる側に集中したといえるだろう。暴露するために用いられた武器はいうまでもなく分析的であり批判的な理性（または知性）であったが、暴露するにつれて、理性や知性もまた他の人間の本性なしには何にもならないということが明白に意識されるにいたってしまう。理性はすでにそのみでは人間の世界を構成しないということを悟った。理性は分析し分解し説明する知性として機能するが、そのような知性の機能を支え、押し込み、調整するのは意志や欲求であることがわかるようになった。そこでこの理性は、いわば技術理性となる。技術理性を効率的にかつ合目的に動くように導きつけかけるのは、意志や欲求や意識のもとにある衝動である。理性人間という人間把握は結局、感性人間に変わり、それはまた生産人間 (homo faber) に変わるようになった。生産人間は感性人間であり、意志人間であり、欲求人間であるという、さらに細分化された焦点が強調される人間把握として転換されていったといえる。それは理性人間という人間把握をもってしては、19世紀前後のヨーロッパの時代的状況的な問題提起と、そこから生ずるさまざまな挑戦に対応できないようになったという理性人間の挫折であり崩壊であったし、そこでどうかしてでも、さらに現実的であり逆動的でありながら、人間的な定着感を感じることができる人間把握の方法を模索するために、身悶えしなければならなかったという意味から、人間の問題が深刻にも提起された大きな転換期であった。

今日はいかなる性格の転換期であるといえるだろうか？今日は、19世紀のヨーロッパではない。そのような式でいえば、20世紀の世界である。すべてがヨーロッパを中心にして論じられた時代は過ぎ去ってしまったために、思考の領域と視覚の範囲がいうまでもなく拡張された。20世紀は19世紀とは比較できないほど、さまざまな側面から変革と発展をみえてきたことは事実である。そこで時代の性格をかなり異って規定せざるをえない。しかし少なくとも人間把握という脈絡からみるときは、19世紀の性格規定ときほど異らなかつたといわざるをえない。いや、ある意味では、19世紀のヨーロッパが現わした性格と傾向をさらに深め、動かしたいものとして確定させておいたという方が正しいのではないだろうか？「そのようにいわざるをえないのは、目ざましい科学・技術の発展と、それがもたらしたすべての恵沢と便利さと向上にもかかわらず、今日の全般的な時代的な

徴候は、人間理性の徹底的な崩壊とそれに由縁する虚無主義的な世界観や、極端的に利己主義的な価値観による混乱と彷徨と挫折と絶望へと変るように彩られているからである。一体我々が、17世紀の哲学者たちのように、神の贈り物としての理性が、人間の行動を正しく、導き、この世には理性の法則が支配しており、人間は実に神の形通りに創造された理性的な存在であると把握し、そのように信じて生きてゆくことができるだろうか？人間と人間の関係が理性の要請にあてはまるように結ばれてゆき、地域や宗族や民族や国家や世界がすべて理性人間の基本と根本にかなうように理解し、説明し、納得しうる側に進んでいるか？そこで我々が、人間はやはり理性的な存在であると考え、信じて口にすることができるだろうか？

でなければ、いくら考えてみても、何度反芻しても、人間は絶対に理性的でも合理的でもない、何かわからないが、少なくとも人間が理性的でないということだけは、確実であるという懐疑と不信が我々を強くとらえているのではないだろうか？そのような懐疑と不信が、幾人かの個別的な感覚や見解にとどまるのか？でなければ、それが今日を生きゆく同世代人の根拠ある共通感覚であろうか？

私は、19世紀が人間理性のヨーロッパ的な規模における崩壊と、そこから派生した人間学的な転換であったとすれば、今日の20世紀はそれが全世界的な規模に拡大、深化した時代であるといえると思う。そのために、19世紀のヨーロッパで提起された人間把握の問題は、そのまま今日の問題であるともいえるだけでなく、さらに濃くさらに深く我々に実感され、したがってさらに切実に提起し、対決しなければならない問題であるともみなければならない。そしてそのような脈絡のもとで19世紀まで、いわば、ヨーロッパ文明の着実なる人間学的な礎石の役割を担うことのできた理性人間であるという人間把握がこわれてしまう過程のなかで、そしてそれ以後につづいた歴史の流れのなかで、マルクス主義がつくりだし、提示した異質的な人間把握が勢力を拡張し、結局は今日の世界を二つに分けた人間学的な危機にまで追いやられるようになったものとみることができ、また、そのようにみなければならない。それは今日の人間学的な危機を克服することができ、堅実なる人間把握の定立・展開のために、何よりも必要な既存の作業となるからである。マルクス主義の哲学体系は、マルクスによってエンゲルスの協力によって枠組みが形成され、それ以後に排出された多くの学者や政治家たちによって発展・拡張・整理・補完された。しかしここで私が焦点をおこうとするのは、そのような人間学的な転換期を迎えて、根本的な人間把握の変革が要請されたとき、その変革（もちろん、さまざまな方向と性格の変革の中で、マルクス主義側の変革）を形成、主導するようになった方向転換の契機を明らかにしてみたいのである。そこで、フォイエルバッハの人間把握を転換期に対応するフォイエルバッハ的な姿勢という角度からみてみよう。

### Ⅲ. フォイエルバッハの人間把握

#### A. フォイエルバッハの基本的立場

##### (a) 宗教批判

フォイエルバッハは、みずからの学問的な関心の展開方向を描いた『私の哲学的展開過程の性格描写のための断片』<sup>2)</sup>で、「私の最初の思想は神であり、第二の思想は理性であり、そして第三であり最終的な思想は人間」であると記録しておいた。

彼は哲学史的な研究や観念論批判を含めた自己の著作はすべて、「一つの目的と一つの意志と一つの思想と一つの主題に捧げられた。その主題というのは、宗教または神学であり、いかなる作品であるかを問わず、すべて宗教と神学に関連している」<sup>3)</sup>という点を強調した。フォイエルバッハの場合には、宗教批判こそその思考と叙述の核心をなしたのである。それは彼の哲学的な世界観がすべてその方に向かったし、その後それをめぐって発展してきた中心となる意識の地平であったし、その他の彼の立場をすべて規定し、そこに形をもたらし中心であったとみることができる。

宗教はフォイエルバッハにおいては、人間文化の歴史における根源的な現象であり、それを理解するときはじめて人間を理解できるようになる性格の現象であった。そこで彼は、自らを無神論者であると呼ぶことに対しては、頑強に拒否する態度を取った。彼は宗教を破壊しようとするのではなく、宗教を新しく解釈しようとしたし、そのようにすることによって、宗教が人間に賦与する幻想的な結末が現実のなかでどのように適用できるかを明らかにしてみようとしたのである。そしてそれは何故かといえば、フォイエルバッハにおいては、宗教とはどこまでも人間中心的世界観であり、窮極的には、神の崇拜でなく人間の崇拜だからである。宗教はまた必然的にその中に自然を内包するようになるので、人間は自然との結びつきを土台とする自己座標を、宗教を通して徐々に意識するようになる。それは、人間は宇宙の中にある一つの自然の部分でありながらも、また自分自身の中に、宇宙内に存在するすべてをくまなく内包する至高の存在という座標の式をもの語るのである。機会のあるたびごとにフォイエルバッハが強調したように、自然の一部でありながら自然に依存する人間はまた自分自身を物理的な必然への隷属から解放せしめ、その自然を自己の支配のもとにおこると、たえず努力する意識的な存在でもあるのである。

このような脈絡から、そしてこのような視覚から、宗教とは人間の理解たらざるをえず、その社会的な役割を遂行しうるためには、人間学にならなければならないと主張したのである。なぜな

ら、もし宗教の核心である神が、下等の人間的な属性と関連をもたないかぎり、絶対他者であれば、神は人間にとってきわめて無意味であり、したがって、人間に与えることのできる何のことももっていない存在になってしまうというのである。そしてもし、神が人間とは全く関係がなく、異質的な存在だとすれば、神の完全性は、人間を絶望させたりも、だからといって鼓舞させたりもしない、きわめて遠い存在になるだけである。神は人間とは何の関わりもない存在であり、だから何の道徳的な意義もなくなる。フォイエルバッハは結局、それまでの人間把握はそれまでの宗教（とりわけキリスト教）に圧倒的に隷属した位置から脱けられなかったために、新しい人間把握の方向模索と定立のための努力は、宗教（キリスト教）批判から出発せざるをえないのであった。フォイエルバッハは自己の宗教批判がその根本にもっている考えは、「信仰の代りに不信仰が、聖書の代りに理性が、宗教と教会の代りに政治が、天国の代りに現世が、祈りの代りに労働が、地獄の代りに物質的窮乏が、そしてキリスト教徒の代りに人間が出現しなければならない」<sup>4)</sup>と力説することによって明確にした。

##### (b) 哲学批判

フォイエルバッハの哲学は、ヘーゲル哲学をそれから完成されたと考えられてきたドイツ観念論をこわし、その位置に新しい哲学をうちたてようとする孤独な試みであった。観念論の哲学がすべての根源に、精神または理念があり、それが世界と人間のすべての現象をひもといてゆくとする立場であるのに反して、自然と感性をさらに根源的なものとみる反対の立場をうち立てた。フォイエルバッハの新しい哲学は、「人間を人間のもととなる自然を含めて、哲学の唯一かつ普遍的な最高の対象」<sup>5)</sup>とみなす哲学であった。

したがって、フォイエルバッハは、人間がそして人間の本をなす自然が、真理の唯一の基準であると規定したのである。このような自然主義の立場が、新しい哲学の立場であり、それがすなわち、彼が編纂した人間把握の基本の立場でもあった。それはいわば、自然に基本をおいた現実的な人間を把握しようとする人間学的な立場であった。

フォイエルバッハのこのような基本的立場は、かって二十一歳の若い年で学問に熱をあげた学生時代から、つねに彼の心の中にうっそうとしていたようである。彼は父に送った手紙の中で<sup>6)</sup>

私は自然を自分の胸の中に不等にもかかえたいです。怯けづいた神学者は、この自然という深淵の前で身退きます。私は人間を神学者や解剖学者や法律学者の対象となっているものではなく、哲学者にだけ対象となる総合的な人間を私の胸の中に不等にもかかえたいと思います。

2) Ludwig Feuerbach, Sämtliche Werke. Ⅱ (Stuttgart-Bad, Cannstatt, 1960-1964) S. 358.

3) *Ibid.*, Ⅵ, S. 6; Ludwig Feuerbach, Gesammelte Werke Ⅱ (Berlin, 1967-) S. 12.

4) 茅野良男「哲学的人間学」(東京: 瑞書房, 1979) p. 107 に引用されているものを引用

5) ルードウィヒ・フォイエルバッハ: カンデソク訳「未来哲学の根本原則」(ソウル: 文化出版社, 1983) pp. 85-86.

6) 茅野良男「哲学的人間学」p. 103.

と、若い学徒の切なる訴えを送ったことがあった。フョイエルバッハの強烈なる探求の熱情は、早くから自然と総合的な人間に傾注したし、それをヘーゲル哲学への全身投球的な没入と、結局はそこから脱け得ようになるフョイエルバッハ哲学の定立を指向するようになる全過程を導いていった根本のモチーフであったということが出来る。そしてそれは、フョイエルバッハがつねに願った哲学の改革を基本的な準拠とするともいった。フョイエルバッハは、哲学の改革こそ時代の要請であり、人類が当面した転換期に必要な、真の対決の姿勢であると考えたのである。その時代は、世界的な見地が没落したときであったために、もちろんさまざまな要請と挑戦があふれでてきたし、そこに対応する姿勢が対立するようになる。古くなったものを維持し、新しいものを追放するという叫びがあるかと思えば、新しいものを実現させなければならないという主張が展開されたりもした。しかし、フョイエルバッハの視覚は未来からの要請の側をながめるものであったし、成就された将来と前進する運動を見つめる立場であった。

## B. フョイエルバッハの人間把握<sup>7)</sup>

(a) 人間は真なる人間になりえない人間の生活のなかで、偽りの人間として生きてゆくように強要されているという人間把握（人間疎外）：

フョイエルバッハは、現実のなかでいつも見、知り、つきあう人間は、真の人間として生きてゆくのではなく、真の人間であることを失い、偽りの人間を真の人間と錯覚して生きてゆかざるをえない状況と条件のなかに閉じこめられている存在であるとみたのである。真の人間を失ってしまうことは、本来、人間のもっている力や能力を、人間からとりあげて、それを神や神のような崇拜の対象におしなべて移しておくことによって発生する悲劇である。それは、人間がほかでもない、自己自身を自らつくりだした物や制度や観念や思想や信念に隷属された存在に転落するようにするということを意味する。ところがフョイエルバッハの場合には、他のどの人間の製作よりも宗教が最も根本的な人間隷属の対象であるために、真の人間であることを回復する条件は、すなわち宗教の本質を明らかにする宗教批判を通してのみ充足されうるとみたのである。

とすれば、どうして宗教が人間をして真の人間であることを失うようにしたのか？それは、宗教の本質を知らなかったり、また、誤って知る錯覚とか誤謬がもたらす結果である。そこでフョイエルバッハは、宗教とは結局、人間の自己意識にすぎなかった神に対する意識を、あたかも絶対的な対象であるかのように感じせしめる虚偽と錯覚の体系であると規定する。もちろん、既成宗教やその信者たちはそのように考えない。しかし、人間が真なる自己の姿を失って生きてゆかざるをえな

いのは、神に対する人間の意識は他でもない、人間の本質に対する自己意識ということを経ることのできない誤った考えだからなのである。しかし人間は、いつも自分自身の本質を、初めはすべて自己の外においてみようとし、そのようにした後に、自己の本質を自らの中に発見するようになる。人間の本質は、まず他の対象の中から外にあるものと意識される。それがそのまま考察されてしまったのが、宗教だというのである。そこで、人間と神が結局はまったく同じものであるために、一度分かれた二つの互いに異った実体と信ずるようになった状況では、一方の豊饒は他方の貧困たがざるをえなくなる。人間が悲惨であればあるほど、神はそれだけ優越するようになるのである。そこで人間は、良く願わしいことはすっかり神に移しておき、自分自身はいうまでもなく悪く、不足な状態から見せかけのものとなる。このようになった状況と条件のなかに閉じこめられている人間は、本来の人間ではない。本来の人間は、神に帰属したすべてのよいものと偉大なものと美しいものをすべて自分のものとしてそなえている人間なのである。それが人間の真なる人間らしさである。神の意識とは、人間の自己意識にすぎないために、神というのは、人間の悲惨な状態にまとめる全知・全能の絶対他者でなく、まさに、全知・全能の意識をもった人間の真なる人間らしさを回復せしめるために、その秘密を暴露しなければならない虚偽であり仮想であるにすぎない。

そのために、宗教の真の本質は、実際は宗教の人間的な本質にすぎない。宗教の中から外に歩みはじめた人間の真の本質をもう一度自分のものとして獲得しようとするのは、外に歩みはじめ自らを圧倒するようにならないように、本来の人間の性質を守るのである。人間の真なる本質が、このようによく偉大で美しいものであれば、実践面で要請される人間間の第一規範は、人間の人間に対する愛以外にないだろう。人間は人間にとって神である。フョイエルバッハの人間把握は、人間の位置を神の位置にまで引きあげる。

(b) 人間の本質は理性と意志と心情のすべてが備わり、絶対かつ完全な人間になりうるが、そのなかでも特に心情が中心となる役割をはたすとみる人間把握（感性人間または心情人間）：

フョイエルバッハは、普遍的かつ理性的なものが唯一の實在性とみるヘーゲルを批判しながら、感覚的な個別存在こそ真の實在であると主張した。このように感覚的な個別存在の實在性を強調するフョイエルバッハは、すべての思惟、理性、理論も結局、感覚や感性の作用のなかに包まれ、またそこに基礎をおいているのである。人間の感覚や感性は、人間の自然であるが、理性的なものもすべてこのような人間の自然から出てくるようになる必然的な結果なのである。とすれば、理性的なものは、すべて人間の自然の中にその根をおろしているものと、自然や物質こそ真の實在だというのが明白であるとみた。このような広い意味の感覚が人間の全体的な本質であるというのがフョイエルバッハの基本意識である。

人間が広い意味の感覚を通して意識するようになる人間の本質は、理性と意志と心情または理性と意志力と愛である。真なる人間の本質は思考し、意欲をもち、愛することである。そして理性と

7) フョイエルバッハの人間把握に対してはルードヴィッヒ・フョイエルバッハ、バンスンギョン訳「キリスト教の本質」（ソウル：鍾路書籍、1976）と前に引用したことのある「未来哲学の根本原理」を中心にその内容を整理してみたのである。

意志と愛の統一体が人間のなかにありながら、個別的な人間を越えて神的な三位一体として表象される人間の本質なのである。理性と意志と愛は人間に生命を賦与し、それを規定し支配する力であると同時に人間の本質を下から支えている神的かつ絶対的な力でもあるといったのである。

このようにみると、人間の本質を構成するものは、理性と意志と愛がともに動く統合的な場(field)としての自然に基礎をおいた意識であるといえる。そこで、人間の本質としての感覚が、下から支えている意識は、自己確認であり、自己肯定であり、自己愛であり、自己完全性への歓喜である。そしてそのような人間の本質こそ根源的なものであり、神的なものであり、真の意味での本質と対象であるという意味をもつようになり、超人間的な思弁を媒介とする哲学や宗教のように、派生的なものや主管的なものや人間的なものや単純な手段と道具であるという意味をもつようになることがないのである。

(c) 人間は本来、我と汝とがまじわる統一的存在であり、共同的存在であり、類的な存在であるという人間把握(類的存在):

フョイエルバッハは、人間とは自らの人間らしさを対象として意識することのできる存在であるとみる。彼によれば、単に一つの個体としての自らを意識するのは動物にも可能なのである。しかし、自分が一つの個体でありながらも同時に、みずからの一般的、類的本質を対象として、それを意識できるのは、人間の独特な能力なのである。いわば、人間だけが自分のような同類(自己の類的紐帯)—自分だけでなく自分を含む人間—一般の本質(人間性)を意識できるのである。一般に人間は思惟する存在であるという点から、他の動物と区別されるというのが人間が、思惟できるのも人間の同類を意識する存在だからである。人間が思惟という類的機能をもつということ、だから人間は自らとともに対話することもでき、そのような意味から自分自身を他の人の位置においてみることもできるということ——このようなことが可能であるということ自体が、思惟を通して、人間は自らにおいて自分自身となると同時に汝になりうるということをもの語るのである。それは人間がみずからの類や一般的な本質を意識しているという証拠でもある。人間は決して自分自身の個性だけを対象とみなさない。

フョイエルバッハは、伝統キリスト教の三位一体説の人間学的な解釈を通して、人間が類的、共同的存在であることを力説する。彼は、宗教は結局、人間把握のための最短コースであると考えたためである。三位一体の父の格位にある神は、フョイエルバッハによれば、極めて孤独な本質である。ところが、孤独な神からは愛や共同生活や、私を探し求める本質的な欲求が生じえない。そこでそのような欲求の発生を従来の宗教では、次のように説明する。すなわち、神の本質の孤独な生活のなかで、格位をただせば、神と同一なもう一つの本質的な存在として、父としての神と区別される子どもとしての神をうちたてることによって相互関係の枠をそなえ、その枠のなかで説明するのである。いわば、我と汝の人格的な相互関係の原型を設定したのである。要するに、フョイエル

バッハは我に汝が必要であるということ、すなわち、人間はもともと我と汝の統一的存在であり、共同的存在であり、社会的な存在だということをキリスト教の教理の一部分を借りて力説したのである。

しかしフョイエルバッハは、従来のキリスト教は、人間存在が共同的、社会的存在であるという自覚をもちえずにきたとみる。なぜそのように見るかといえば、キリスト教の神は結局、類と個体の直接的な統一体が一つの人格の中に集中したものと外では考えることができずと規定するからである。キリスト教では、類が同時にそのまま個体(神)と同一視されているからである。もともと個体でありながらも同時に完全性と無限性を充分にもっている類でもあった個体という概念は、さほど知られていないのである。キリスト教には類という概念が全く存在しないのである。したがって、我の完成のためには、汝が必要であり、人びととともにまじわることによって初めて人間というものを構成するようになり、ともにまじわることによってのみ願わしくふさわしい人間になりうるという客観的な意識がはっきりとしないというのである。もしキリスト教ですべての人間を罪人とみるとき、一つ一つの個体はそれ自体として完結された本質として、類的な相互関係が別の意味を現わしえない単独者としての人間把握が心の底に敷かれている。しかしフョイエルバッハは、このようなキリスト教の人間把握は誤りであったと批判する。結論的にフョイエルバッハは、個体としての人間は互いに異り、欠点が多く、短く生きて死ななければならぬ有限かつ不完全な人間であるが、全体としての人間は、そして人間の類的本質は、永遠かつ無限であるとみるのである。

## IV. いくつかの評価

かつてソドニー・フックは、フョイエルバッハを次のように評価した。

最近になって、現代哲学の内部から認められるようになったマルクス主義の台頭、そして実存主義哲学のドイツにおける発展(ハイデッガーやヤスパーズ)、ヘーゲル主義の再生、宗教哲学や宗教心理学に対する関心がさらに一層高くなる傾向——このような最近の趨勢のなかで、フョイエルバッハは、次第に哲学する人たちの意識の視野に入ってくるようになってきた。さらに正確にいえば、フョイエルバッハは過去の地位を回復しているといわなければならないだろう。そのようにいうのも、一体彼は孤独で謙遜な人ではあったが、あるとき(たとえ、十年間にすぎなかったが)、ドイツの哲学と文化の一切を自分の影響のもとにおいていたことがあったからである。ヘーゲルは一八二〇年から一八四〇年まで、ドイ

ツの思想界に君臨したすばらしい帝王であるとすれば、フョイエルバッハは『キリスト教の本質』を出版した一八四一年から一八四八年の革命前夜にいたるまでの哲学的な反逆者たちの頭目であった……」<sup>8)</sup>

フョイエルバッハは、ドイツの思弁哲学を主流と認める正統派の哲学者たちの立場からは反逆者たらざるをえなかったのである。しかし、彼が方向転換の時期をそなえるのに寄与したとみることが出来るマルクス主義哲学の陣営においてもさほど不思議な評価を受けることができなかった。フョイエルバッハは哲学者であるというよりは、皇帝と教会に対する闘争であるという特殊な条件のもとでの闘争を合理化するためのイデオロギにすぎないと、評価されるかと思えば、哲学的な重要性が誤って付け加えられた群小の哲学者であると規定されたりもした。マルクス主義の流れによって現われたその後の哲学者たちは、マルクス主義の真理にいたる不完全な序曲であり、ヘーゲルとマルクスを結びつける過渡期の思想家であるといわれたりもする。

若いマルクスは、フョイエルバッハに対する評価を次のように下したことがある。

フョイエルバッハの宗教批判は、人間こそ人間に対して最高の存在という教義に帰着しうる。すなわち、人間をして隷属を強要された取るにたらず、捨てられバカにされる存在にする一切の条件を撤廃しなければならないという至上命令に帰着されるのである。<sup>9)</sup>

しかし、急進的な同時代人たちは、フョイエルバッハが、①、宗教的な関心の方が革命的な関心の方を凌駕したということと理由に、人間を崇拜の対象とみなした新しい宗教を提唱しただけであり（本人はそのように考えなかった）、②、現実的かつ歴史的な人間を解明せず、人間という抽象物を提示しただけであり、③、世界も多角的に解釈するにとどまったが、本当に重要なことはそれを変革させることであると評価した。

とすれば、フョイエルバッハは、このような評価を肯定しただろうか？フョイエルバッハは自分なりの評価があった。そしてそれは次のような形として現われた。

皆さんは次のようにいう。すなわち、今日の問題となるのは、神が存在するのかが存在しないのかではなく、人間が存在するのかが存在しないのかである。神が我々人間と本性をともにするのか、でないのかでなく、我々人間が相互間に平等でなければならぬのか、そうたりえないのか、一体またはいかにして我々人間がパンを食べることによって主の肉体と全く同じ肉体をもつことができるのか、できないのかでなく、我々人間が自分の肉体を養育するのに充分なパンを手にいれることができるのか、できないのかである。神のものは神に、シーザーのものは

シーザーにかえすのか、そうでないのかが問題でなく、人間のものを最終的に人間にかえすのか、そうでないのか、我々がキリスト教徒なのか異教徒なのか、または、有神論者か無神論者かではなく、我々が精神においてや肉体において健康で自由であり、活動的であり生命力のあふれた人間であるのかそうでないのか、またそのようになりうるのかどうかであると。皆さん、本当にそうです。

そのことを私は認めます。皆さんがいうことは、そのまま私がいいたいことです。私を以て唯物論者だと断定する人は、私に関して何もいわず、何も知らない人です。神が存在するのকাশないのかという問題や、有神論対無神論の対立は、19世紀の今日でなく、16世紀や17世紀に似合った問題です。私は神を否定します。しかしそれは無神論を提唱するためではありません。神を否定することによって人間存在の否定を否定するためです。人間が勉めている幻想的かつ空想的、または彼岸的な状況や、現実生活のなかでは、人間を必然的に墮落に導いてゆこうとする状況を、私は主体的であり、現実的かつ社会的でもあった人間の状況に変えるのです。神が存在するのকাশないのかという問題は、私においては、人間が存在するのকাশないのかという問題以外の何者でもないのです<sup>10)</sup>

結局、フョイエルバッハは、いかなる評価、批判をされるとしても、自分自身は立派な人間を探し出す課題に最後まで忠実であろうとしたという自己の立場と意図を明確にしたし、そのような観点から自分を評価してくれることを願ってきたものとみることが出来るようである。

## V. 統一思想を通してみた批判<sup>11)</sup>

統一思想の基本前提は、人間の本性が人間の墮落によって喪失したということである。本来、実現せしめうるように創造された人間の本性とそこに基本をおいた理想世界はそのために、人間の力だけでは実現不可能になった。統一思想は、フョイエルバッハのように現実の人間が真の人間から遠ざかったということと、そこでどうしようもなく願わしからざる状況と条件のもとで生きてゆかざるをえなかったとみる。しかし人間が、その本性を喪失し、本来の真の人間の位置から離れて現われるようになった事実の原因を、フョイエルバッハは誤った宗教の本質に対する無知や錯覚にも

8) Sidney Hook, *From Hegel to Marx: Studies in the Intellectual Development of Karl Marx* (London, Gollanz, 1936; Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1962) p. 220.

9) *Marx-Engels Gesamtausgabe*, Sektion 1, B.I.-i, pp. 614~616.

10) Sidney Hook, *Ibid.*, pp. 222~223.

11) この部分を書くにあたっては、基本的に Unification Thought Institute, *Explaining Unification Thought* (New York: 1981) を参考としたし、統一思想研究院、統一思想要綱（ソウル：成和社、1981）と李相慶「共産主義の終焉」（東京：統一思想研究院、1984）をともにみえた。

どるのに対して、統一思想は、人間の行為が負わされた誤った選択にもどるのである。我々がフォイエールバッハから誤った宗教意識や宗教信仰が真の人間らしさを失うようにしたり、暗く、成長できない抑圧と隷属の体系になりうることを学ぶことができ、それが今日の人間学的な状況をみているにおいても非常に大きな手助けとなるが、宗教がすべて根本的に、人間の解放をさえぎる東縛だと断定する極端論をそのまま受け入れることができない。墮落した宗教は、人間の本質を崩し、ねじまげ刈りとしてしまうが、真の宗教は、神の完全性と無限性の次元にまで人間を高め、真の人間の位置にもどることができるようにしてくれる存在の威力である。

フォイエールバッハは、人間が理性と意志と愛をすべてともにそなえるとき完全になりうる感性的な存在、または情動的な存在であるとみた。統一思想も人間を基本的に情動的な存在とみるために、どうかすると、似かよった人間把握であると考えられる。しかしフォイエールバッハは、人間が自然に基本をおき、自分自身や他の存在を対象として意識できる力が思惟と意欲と愛として現われ、愛がそのなかでも最も基本的なものであると見るのに反して、統一思想は、神の本質が心情とロゴスと創造性によって構成されているために、神の姿通りに創造された人間も本来の姿通りであれば、心情とロゴスと創造性をその通りもっている存在であるとみるのであり、その中でも心情こそ根となり本となる契機であるとみるのである。しかしフォイエールバッハの人間把握の汝を必要とする我の存在の本質は根本的に我と汝がともにまじわってのみ正しく実現されるのであり、我と汝のまじわりの本となるのが他でもない理性と意志と愛を含めて、それをすべて統一せしめる広い意味の意識であり、それが人間の自然に本をおいた感性（心情）とみることは、理性の絶対優位をうちたてる近世思弁哲学の人間把握よりは、統一思想の人間把握に近い側面もあるといえる。

フォイエールバッハは従来のキリスト教が類的存在という概念を整理できなかつたと批判した。しかし統一思想やその基礎となる原理論は、人間が窮極的に、「為にある存在」として人間の創造主である神までも、喜びの源泉としての対象を必要とする共同的存在ということを強調しているために、フォイエールバッハのキリスト教批判がここではあてはまることができない。それだけでなく、統一思想は、人間が本来、神と全く同じく格位的存在として適った位置を占め、それが宇宙の秩序にさからわず、相互間の正しい関係（主体と客体との関係や、有形世界と無形世界との関係）の中にあるときにだけ初めて、真なる人間らしさを実現せしめようとみるために、フォイエールバッハの人間把握よりさらに次元が高く幅が大きく、具体的な人間把握であるといわざるをえない。

そして何よりもマルクスが評価したように、フォイエールバッハの人間把握は、人間の歴史性または歴史的制約性とそこで形成される物質的な条件による人間規程を徹底的に究明し、真の人間を獲得するためには、構造的な革命の道以外にないが、その点をはっきりできなかったといったが、統一思想は、人間と人間がつくりだす社会は、神がもともと創造された墮落以前の状態に復帰すれば実現されうるとみ、そのために人間による構造的な革命を通しては結局、理想社会が築かれなないと信ずるのである。

## 金泰昌教授に対する コメント



近松良之

(元筑波大学美学)

ドイツ観念論〈哲学〉から、それ以後への移りゆきに関して、私は、後述する三点をかねがね考えていた。金先生の報告をうけたまわって、コメントを付けるのであるが、後述の三点が、イデア・フィックスの如くなっているので、やや角度を変えて、その三点に金先生の報告を重ね合わせることで、コメントにかえさせて載くことにする。

その三点は、以下の通りである。

1. 神の場処 超越性—内在性—世俗性
2. 人間の在り様 実体性—機能性・関係性・函数性
3. 人間の神化 絶対・相対、無限・有限、完全・不完全

人間は後者、相対的なものの絶対化〈世俗的人間の神化〉

先ず1に関して…ドイツ観念論の企ては、超越的な神・イデアの人間内在化であった。カント、ヘーゲルは、神・イデアを人間理性の内部にとり込むことをやった。そのことが、カントの有名な言葉、「わが上なる天上の星、わが内なる道德律」に、端的に示されている。イデア・神は、それまで天上にあった。客観的形而上学という言葉も、そのことを示している。たとえばプラトンでは、イデアは常に太陽に喩えられている。カントは、その天上のイデアを、道德律が根ざす人間理性の内部にとり込む作業をやった。ヘーゲルも、同然である。彼によれば、イデアは絶対的精神の同義語である。

神が人間理性の内部にとり込まれた結果として、従来の神対人間、彼岸対此岸、善対悪の関係もまた同様にして、人間内部にとり込まれて、かつての此岸の人間、悪なるものは、人間の内なる感性の中にとり込まれることになった。神に対立するもろもろは、以後人間の感性に由来するものとみなされるようになった。

ところがフォイエールバッハは、さらに、神の内在化を押し進めて、右の如き感性の内部にまで、神をとり込んだのである。感性化された神は、愛と呼ばれた。